

編集後記

今日は時の記念日（6月10日）。皆さんと同様に、私も時間に追われて生活している。

しかし、時計が刻む時間に、実は実態がないという考えもある。例えば、ある民族の言語には、過去形・未来形がなくすべて現在形ということも、その根拠の一つとして挙げられている。もしかしたら実態のないものに感情が左右されるのは悔しいが、現代人であれば誰でも、時間に追われている感を払拭することは難しい。

だいぶ前のことであるが、現在・過去・未来から始まる歌が流行したことがある。その歌を聴いていると現在と過去と、そして未来は同価に思える。しかし、現在・過去・未来の中で圧倒的に大きいのは過去のボリュームであろう。人類がマンモスと一緒に暮らしていた時をイメージすることもできないわけではないし、高々100年くらい前のことはそれほど難しくなく想像することができる。一方、未来にはタイムマシンにでも乗らなければ行けないし、現在にはたぶんほんの一瞬であろう。現在＝1秒または3秒、という説が有力であるらしい。

多忙な日常診療の中で、時間を割いて論文を書くことの意義は何であろうか？この答えは各種あると思う。臨床神経学新編集委員すべてが一致した回答を示すとは限らない。むしろ編集委員の数だけ答えがある可能性の方が高い。

反対意見が多数出るのが覚悟して、わたし自身の答えを示したい。論文執筆は、「よい医師になるために必須の事項である」から、である。論文で示した患者さんの病歴やMRI画像は一生忘れない。そのデータを基底にして、次に出会った患者さんを正しく、早く診断できる。診断学が他科に比較して、特に難しい神経内科領域では、論文執筆はその分価値が高い。

ちょうど100年前の1913年に戻ってみたい。この年、齋藤茂吉は最初の歌集「赤光」を出版した。茂吉の学位論文はその10年後、すなわち1923年に発表された長文の独語論文で、内容は進行性麻痺（脳梅毒）に関する研究であった。そこにはHideyo Noguchiの脳組織からシュピロヘーター発見の論文が重要文献として引用されている。野口のノーベル賞にも値するこの業績も、1913年の発表であった。ちょうど1世紀前の高い志を持った先達達を思いながら、日本神経学会の特に若いメンバーが、本誌に優れた研究論文を投稿してくれることを期待したい。

編集副委員長として、これからしばらくの間この雑誌に関わることになりました。

どうぞよろしくお願い致します。

（河村 満）

〈編集委員〉

編集委員長 鈴木 則宏 編集副委員長 河村 満
 編集委員 星野 晴彦 亀井 聡 西野 一三 瀧山 嘉久
 野村 恭一 池田 昭夫 荒木 信夫 飯塚 高浩
 編集委員（幹事兼任） 森 秀生 園生 雅弘 高尾 昌樹

「臨床神経学」 第53巻 第7号 平成25年7月1日発行
 編集者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会
 発行者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 水澤 英洋
 印刷所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
 日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>